

即興型ディベート

研究報告集

Research Report of PDA Conferences

オンライン開催

2021 年 8 月 6 日（金）



一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会

Parliamentary Debate Personnel Development Association (PDA)

目次

【即興型ディベート研究報告集】

- はじめに ～「論理・表現」に向けた即興型英語ディベート～
大阪府立大学／一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会 中川智皓
- No.1 岩手県立一関第一高等学校即興型ディベート研究報告書
岩手県立一関第一高等学校 熱海 千乃 教諭
- No.2 教材を「じぶんごと」に落とし込むためのディベート実践
栃木県立佐野高等学校 川俣 海瑠 教諭
- No.3 獨協中学高等学校即興型ディベート研究報告書
獨協中学高等学校 藤田 麻友美 教諭
- No.4 神奈川県立柏陽高等学校即興型ディベート研究報告書
神奈川県立柏陽高等学校 中山 藍 教諭
- No.5 即興型ディベート研究報告集・2人で即興ディベート
神奈川県立大和高等学校 本郷 真由美 教諭
- No.6 富山国際大学付属高等学校即興型ディベート研究報告書
富山国際大学付属高等学校 ワン ローレンス 教諭
- No.7 授業導入に準備型と即興型のハイブリッド・ディベート
長野県伊那北高等学校 池上博 教諭
- No.8 長野県長野高等学校即興型ディベート研究報告書
長野県長野高等学校 徳田 稔 教諭
- No.9 関西創価高等学校即興型ディベート研究報告書
関西創価高等学校 橋爪 伸幸 教諭
- No.10 神戸市立葺合高等学校即興型ディベート研究報告書
神戸市立葺合高等学校 仲村 智子 教諭
- No.11 熊本県立第二高等学校即興型ディベート研究報告書
熊本県立第二高等学校 平井 和仁 教諭

はじめに

～「論理・表現」に向けた即興型英語ディベート～

大阪府立大学 工学研究科 中川智皓
(一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会 (PDA) 代表理事)

昨年に引き続き、本年もPDA全国高校 即興型英語ディベート合宿・大会はオンラインでの開催の運びとなりました。PDAにおける全国での即興型英語ディベート推進活動もオンラインとしており、最近ではオンラインでしかディベートをしたことがないという生徒さんの声も聞き、新たな教育様式が始まっていることを感じます。

さて、いよいよ2022年度からは英語科にて新科目「論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」が始まります。文部科学省学習指導要領には、当該科目においての活動の一つとして、ディベートが明記されています。PDAでの体験会や合宿、大会で取り扱っている即興型英語ディベートは50分（1単位）で完結する形式で設計されており、上記授業においても活用されることを期待しています。夏合宿は今年度で8回目となります。当初より即興型英語ディベートの授業導入を意識し、ルール設計からキーノート、授業導入報告会、教育的配慮を持った指導方法など工夫をしていますが、上記新科目での本格的な授業導入はじめ、「何のためのディベートか」を整理して考えることが必要であると感じています。第一に、外国語科（英語）においては、学習指導要領にあるように、英語での発信能力の育成を強化することが求められます。即興型英語ディベートでは、英語力以外にも論理的思考力や幅広い知識、プレゼンテーション力等複数の力が鍛えられますが、英語科での導入という意味ではまずは英語での発信力を高める一手法として注目することは重要です。一方、昨今、英語教育の低年齢化、海外生活経験などを通し、英語で表現すること自体にハードルがない生徒も増えてきています。その場合、即興型英語ディベートは、論理力や背景知識を鍛えるツールとして活用されることが期待されるでしょう。「論理・表現Ⅲ」では、論理の構成や展開を工夫して、話したり書いたりして詳しく伝える又は伝え合うことなどを目標としていることが記載されています。このように、教員のこれからの指導には、英語自体のほか、聞き手や読み手を説得できるような内容も重要となってきています。これからは英語力のみではなく、“英語力＋内容”を評価する時代になると考えられます。PDAでは、昨年に引き続き、英語力に加え、内容を評価するパーラメンタリーディベート検定®（プレ）を実施します。教員の皆様との意見交換をはじめ、新しい教育様式や時代に適した教育内容の研究を行い、よりよい公教育への一助となりますようPDA一同尽力していきます。

謝辞 公益財団法人 日本財団、公益財団法人 KDDI 財団、文部科学省、大阪府立大学ほか、多くのご支援をいただきました。ここに感謝の意を表します。

※ここでは、パーラメンタリーディベートを通常授業（50分）に導入できる形式にアレンジしたものを、なじみやすい・理解しやすい表現として、即興型英語ディベートと呼んでいます。

日本の一般的な生徒が実施できる形式に、「システム」として落とし込んだ点が特長です。ルールやスピーチシートをはじめとする考案したシステムは、単に一般的なパーラメンタリーディベートを簡素化したという位置づけではなく、議論の仕組みを整理し、教育的効果を高めるためのデザインが組み込まれています[1]。[1] 中川智皓、山内克哉、新谷篤彦、パーラメンタリーディベート（即興型英語ディベート）における議論の整理と評価の一考察、システム制御情報学会誌、Vol.32, No.12, (2019), pp.446-454.

岩手県立一関第一高等学校即興型ディベート研究報告集

熱海 千乃

岩手県立一関第一高等学校

(1)はじめに

本校は、岩手県内唯一の公立中高一貫校であり、併設されて13年目を迎える。中高ともに、授業でディベートを取り上げ、毎年2月には中学3年生と高校2年生の交流ディベートを開催している。

(2)実践内容

○中学3年次：準備型のフォーマットを利用。立論と反論のみの簡易ディベートを体験する。

○高校1年次：準備型のフォーマットを利用。身近な論題を取り上げる。夏以降を目安に、月に1回程度実施する。

○高校2年次：PDA即興型のフォーマットを利用。社会的な論題に取り組む。簡単な英字新聞記事などを利用しながら、社会的問題に関してディベートを行えるようにシフトしていく。知識背景の涵養も目的としており、将来の小論文や面接などにも対応する力が養えると考えます。

※準備型から即興型のフォーマットに移行していく際に、生徒には若干の戸惑いが見られる。回数を重ねるに従って、即興型のフォーマットにも慣れていき、むしろ様々な役割を担えることを楽しむ余裕も見られるようになってくる。

○中高交流ディベート：例年2月25日に中高交流ディベートを実施している。高校2年生と中学3年生合同で実施し、中高生でチームを作ることになる。グループ分けには細心の注意を払い、中学校教員とも相談しながら、生徒の個性や英語力に応じて満足した試合が行えるようチーム編成を工夫する。50分間の授業内で完結するように、準備時間15分、スピーチ時間一人3分（計18分）、振り返り（10分）を目安としてディベートを行っている。

○モデルディベート：本校には英語研究部があり、英語ディベートに取り組んでいる。授業では、英語研究部員によるモデルディベートを見せる機会を設けている。実際のハイレベルな試合を見て、一人一人の生徒がジャッジを経験することで、ディベートに対する興味・関心や意欲を引き出す。結果は、フォームズを使って即座に送信してもらい、結果を共有している。

(3)まとめ

来年度からカリキュラムの中に本格的にディベートが導入されるにあたり、今年度中に中学3年から高校3年までを見通した英語ディベートの年間計画を作っていきたいと考えている。特に中高交流ディベートやモデルディベートは、終了後のアンケートでの満足度は高い。高校生からは「もっと語彙や知識を増やしたい」、中学生からは「高校生のように話せるようになりたい」など前向きな感想が多い。高校生が中学生に対して、積極的に話しかけ意見を吸い上げようとする姿勢や、話すべき内容を丁寧に教えている姿もあり、相互に良い学び合いを深められる良い機会でもある。

【参考文献】「授業でできる即興型英語ディベート」（中川智皓著）、「ディベートを導入した授業実践～発表力・考える力をつけるための指導ステップ～（DVD）」（ジャパンライム）など

教材を「じぶんごと」に落とし込むためのディベート実践

川俣 海瑠

栃木県立佐野高等学校

(1)はじめに

本校は、今年で創立120周年を迎える公立校である。中学校を併設し、早い段階から授業内でディベートを行っている。英語が得意な生徒も多い一方、模試の標準偏差値が30となるなど、苦手な生徒との差も大きい。この取組は、英語が得意な生徒も苦手な生徒も、教材を「じぶんごと」として落とし込むことを目的としたものである。

(2)実践内容

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ
使用教材	CROWN English Communication Ⅱ（三省堂）
単元名	Lesson 4 “Crossing the Border”
授業内容	Lesson 4は、国境なき医師団の一員として発展途上で活躍した女性医師の物語である。医療器具や酸素ボンベが足りない地域で、彼女は助かる可能性が低い患者への酸素の供給を止め、他の患者への医療行為を優先した。そこから端を発し、まとめ活動として「医師は、医療機器が足りない状況下では、助からない患者よりも助かる患者を優先すべきである」という論題でディベートを行った。その後、「自分がその医師だったらどのような判断をするか」というテーマでエッセイを書いた。
生徒の様子	どのクラスでも活発な意見交換が行われた。賛成側であれば「医師はより多くの患者を救う義務がある」、否定側であれば「命の重さは全員同じだから区別するべきではない」などの意見が出された。英語の得意な生徒と苦手な生徒を混ぜてチームを構成したため、得意な生徒がミニティーチャーとして苦手な生徒に教えるなど、生徒間での教え合いが生まれた。その後のエッセイライティングでは、ディベートと同じように2つ理由を挙げて書かせた。

(3)まとめ

教材をただ読むだけでなく、教材についてディベートをすることで、生徒は自分なりに意見を持つことができた。「じぶんごと」に落とし込むことによって、生徒の教材への興味関心が高まった様子である。また、ディベートの実践だけでなく、その後にエッセイ書かせたことで、生徒はより自分の意見を深めることができた。

即興型ディベート研究報告集

藤田 麻友美
獨協中学高等学校

(1)はじめに

高校2年のコミュニケーション英語Ⅱで行ったディベートの授業実践について報告をします。
普段使用しているCROWNの教科書 Lesson4で、国境なき医師団の貫戸朋子さんを題材に、
国際協力やトリアージなどの医療問題について学んだ。今回はそれを発展させ、医療倫理につ
いて深く考えるきっかけとなるようにディベートの授業を実施した。

(2)実践内容

【導入】論題 “Making designer babies should be criticized”に興味を持たせる (1時間)

1989年に発売されたJamiroquaiの“Virtual Insanity”を使う

- ① MVを見せる
- ② 歌詞カードを配り、以下の部分について考えさせる
“And now every mother can choose the color of her child”
“That's not nature's way”
- ③ 生徒にこのフレーズが何を意味しているのかをchrome bookを使いながら調べ考えさせる
(※この時点で論題が何かを生徒たちは知らない)

生徒の実際の反応 ・ the color of the childのcolorって何の色のことですか？
・ 母親が子供を選べるってどういうことですか

⇒自分のアバターなどを作るイメージというヒントを出す

⇒2018年に中国でデザイナーベイビーが生まれたことに気づく生徒がちらほらでる

- ④ 2018年の中国でデザイナーベイビーを誕生させた科学者が世界中から批判をされたことを紹介しながら、デザイナーベイビー（ゲノム編集をした子ども）を誕生させることは批判されるべきかどうかを考えてくるように指示を出す

【展開1】論題 “Making designer babies should be criticized” について全体討論する (1時間)

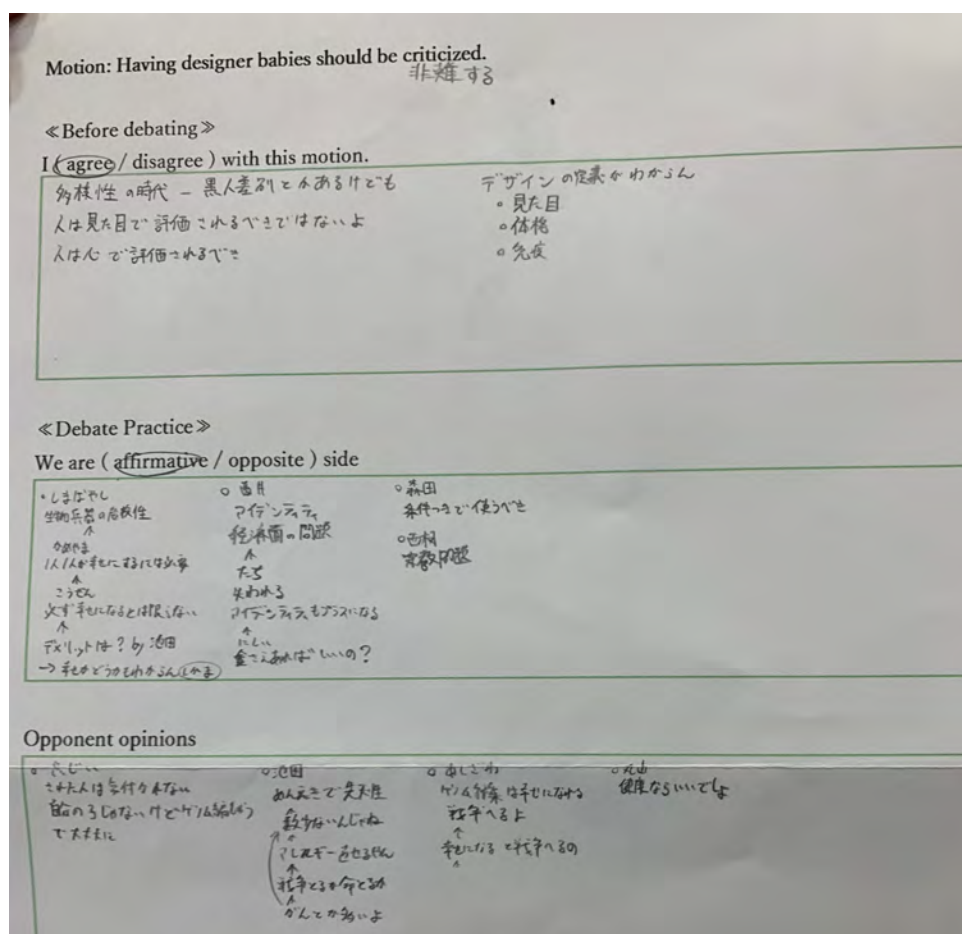
- ① 論題を発表した上で、「デザイナーベイビーを誕生させる」とはゲノム編集をするということを含んでいることを確認する
- ② クラス全員にAgree or Disagreeを決め、ハンドアウトに理由を自由に書かせる
- ③ クラス全体にAgree か Disagreeのどちらか札をあげさせる
※クラス全体では Agree 20 Disagree 17とほぼ半々に分かれた
- ④ AgreeとDisagreeのグループについて、交互に意見を言わせる
Agreeの意見の例：ゲノム編集の技術が軍事利用される可能性がある
障害等も個性の一つであり、ゲノム編集によってアイデンティティが失われる

Disagreeの意見の例：ゲノム編集できる部分に制限をかければよい

病気で苦しむ人が減る可能性がある

自己肯定感が高まる

- ⑤ 自分の子供について、デザイナーベビーを望むか Agree か Disagreeの札をあげる
※クラス全体では Agree 12 Disagree 25とほぼ半々に分かれた
- ⑥ 自分がデザイナーベビーだと親にカミングアウトされた場合、受け入れられるか
Agree か Disagreeの札をあげる
※クラス全体では Agree 10 Disagree 27とほぼ半々に分かれた
- ⑦ 次は小グループでディベートするので、考えてくるように指示



【展開2】論題 “Making designer babies should be criticized” について6人グループでディベートする（1時間）

- ① Agree 3人、Disagree 3人に分かれてディベートをする

〈やり方〉

- 1 Agree側が一人一つ立論をする（2分）
- 2 Disagree側が一人一つ立論をする（2分）
- 3 Agree側が1ずつ反論する（1分）
- 4 Disagree側が1ずつ反論する（1分）
- 5 ディベート部の生徒がコメントを簡単にする

※パラメンタリー方式で実施したかったが時間の都合上、上記のやり方となった

- ② Agree 3人、Disagree 3人に分かれてパラメンタリー形式デモディベートをする
以下はその際のフローシート

The flowchart is divided into four columns representing the participants: Gov1 (立論), Opp1 (立論), Gov2 (反論), and Opp2 (反論). Gov1's opening statement includes points on diversity and Black lives matter. Opp1's opening statement includes points on health and management. Gov2's response includes points on health, education, and social security. Opp2's response includes points on health, education, and social security. The flowchart also includes various handwritten notes and arrows indicating the sequence of arguments and responses.

(1) まとめ

① 洋楽の歌詞の内容を考えさせたことで、「日本語に直せること＝内容がわかること」ではないことが生徒たちに伝わった。普段に耳にしている洋楽にも、もっと深く耳を傾けてみたいなどの感想が見られた。

② 全体討論の形式は、題材についてのブレインストーミングの役割を果たすことはできたが、論点が多岐にわたることで、一つ一つの議論を深めることが難しいことがわかった。

③ グループでのディベートについては、もっとやりたいという意見が出ていたので、次回はパラメンタリー形式のやり方を事前に教えた上で、しっかりやりたいと思う。

④ 今回のテーマについては、男子高校生には難しい部分もあったが、興味を持った生徒も多くおり、関連図書を紹介したところ読み始めた生徒もいる。

⑤ 普段の授業では、なかなか生徒の自由な意見を促す展開ができていないので、積極的にディベートの要素を取り入れていきたい

即興型ディベート研究報告集テンプレート

中山 藍

神奈川県立柏陽高等学校

(1)はじめに

本校では令和元年度より本格的にDebate活動を全学年で授業に導入している。3年間の一貫した英語教育において初年度の活動が土台を築くものであると考え、本稿では1年次の活動内容を中心に報告する。

(2)実践内容

1. 教育目標

本校英語科では「他者と考えを伝え合うことのできる英語運用力を養う」ことを全学年共通の教育目標としており、とくに口頭での運用力涵養が重要であると考えている。

2. 実践内容

1) 春休み(入学前)の課題として”What’s Going on in Myanmar”について考えさせ入学後の授業で英語による Presentation を行った。

2) PDA による Model Debate 動画を Google Classroom に配信するとともに Debate Script を配付した。

3) 授業では、立論練習に時間を割いた。SQとAPに分け、とくにSQの”Seriousness”の描写に注力させた。

4) 立論練習に3時間程度を費やした後、反論練習を行った。PMのArgumentの要約を練習した後、反論をDirect Refutationに絞り2時間程度、練習した。

5) PDA方式のFormatに沿ったDebate手順を確認し、Replyを除いた形で2対2のDebateを行っている。夏季休業後の授業でReplyを練習し、3対3のDebate練習を行う予定である。

(3)まとめ

1) Debate活動をEnglish Communication I授業の中心に据えている。教科書の内容は授業で扱わず試験範囲に2割程度含めている。従来型の受動的授業に比べ、生徒の活動意欲は高い。

2) 英文の読解練習用にDebate Scriptを複数作成して生徒へ渡し試験範囲としている(4割)。

3) Vocabulary Buildingを目的として単語集を範囲とした小テストを毎週、実施している。

4) 初見のDebate Script(本校作成のもの)をECIの総合問題として、定期試験に出題している。立論は作文問題としてECI及びEEI中間試験で出題した。次回反論を出題予定である。

5) 本年度1学年では、ECIの授業でDebate活動のみを行っている。満足のいくDebate実践までの道のりは遠いが、生徒の学習意欲は従来と比較して格段に高い。1学年約300名のうち、のべ200名以上が作文及び読解夏季講習受講を申請し、別に設定したDebate活動実践に特化した講座を、40名が受講予定である。

即興型ディベート研究報告集・2人で即興ディベート

本郷真由美

神奈川県立 大和高等学校

(1)はじめに <とっても簡単！2人で即興ディベート>

英語ディベートの「最初の1歩」におすすめの活動です。5分程度で扱えるので、帯活動として使っています。コロナ禍でグループ活動が制限されている中、ペアでできる活動です。

(2)実践内容

ステップ①ペアでジャンケンをします。” Should all English classes be taught by native speakers? 「英語はネイティブが教えるべきか」などの命題に対し、勝った人は Yes, 負けた人は No に分かれて意見と理由を2つ考えます。(1分間)

- Yes の人から、自分の意見を言います。(各45秒)
- Yes の場合の理由の例と、No の場合の理由の例をスライドで簡単に紹介します。(40秒程度)

ステップ② ステップ①を2～3回実施した後、ステップ②に進みます。まず、ジャンケンをして Yes、No に分かれ、理由を2つ考えさせます。(1分間)

- 1) Yes の生徒が意見と理由を1つ目を述べます。(30秒)
- 2) No の生徒は、相手の言ったことに対して、” You said ～, but it is not true, because～.” と反論を加え、その後、No である理由1つ目を言います。(50秒)
- 3) Yes の生徒は、相手の言ったことに対して、” You said ～, but it is not true because～.” と反論を加え、その後、Yesである理由2つ目を言います。(50秒)
- 4) No の生徒は、相手の言ったことに対して、” You said ～, but it is not true, because～.” と反論を加え、その後、No である理由2つ目を言います。(50秒)
- 5) Yes の場合の理由の例と、No の場合の理由の例をスライドで簡単に紹介します。(40秒程度)

※it is not true は、場合により it is not important や it is not always true.に 変えて言っても良い旨を最初に伝えておきます。

(3)まとめ

短時間でできるので、授業の最初の帯活動として活用しています。英語を話す雰囲気になりますし、何より、そのレッスンのテーマに従って命題を選ぶと、レッスンの導入として使えるのが便利です。例えば、「チェロキー語を存続させる取り組み」を扱ったレッスンでは、「日本は英語を公用語化すべきか」「アイヌなどの少数派の言語を存続させることは重要か」など、その日学ぶ内容に合わせてテーマを変えて、本文の導入に利用しています。今後は 3 人に分かれ、Yes→No→Yes→No→Yes→No と、交互に主張と反論を行う活動に挑戦する予定です。

(参考文献) 小林良裕「高校生のための初めての英語ディベート An Introduction to Debating in English: Book 1」 S.A.D works

即興型ディベート研究報告集テンプレート

ワン ローレンス

富山国際大学付属高等学校

(1)はじめに

International English Course students have a 2nd year class entitled “English Conversation.” During that class, in addition to Speech and Presentation skills, which are taught in the 1st term, Debate skills are also taught.

(2)実践内容

The methodology for teaching Debate skills in a back-to-back 50-minute class (x2) is as follows: (1) Brainstorming: Students work individually, in pairs or in groups to think of a chosen resolution as Government or Opposition side for 5-10 minutes. (2) Speaking Warm-Up 1: In pairs, Government side makes a 1-2 minute speech to another Government side student, while in pairs, Opposition side makes a 1-2 minute speech to another Opposition side student. The goal is so that students of the same side get more ideas of what to say in support of their side. (3) Speaking Warm-Up 2: In pairs, a 1-2 minute speech is made between students from different sides (GOV vs OPP). The goal is so that students know what kind of speech to expect from the other side. (4) Team Preparation: Groups of 3 students prepare their position and possible rebuttal strategy for 3-5 minutes. (5) PDA-style debate: Students engage in PDA-style debate.



(3)まとめ

This class is successful in getting students to practice speaking continuously, thinking of different resolutions, and getting used to the PDA-style debate. However, we wish to further develop strategies for the 2nd and 3rd speakers, in terms of rebuttal strategies, reframing strategies, and summary/comparison strategies.

授業導入に準備型と即興型のハイブリッド・ディベート

池上 博

長野県伊那北高等学校

(1)はじめに

英語表現で気軽に定期的にディベート活動を導入する試みを行った。第1回は1年次の9月。多くの生徒がディベート活動に抵抗感を示した。第2回は11月下旬、学年行事としてディベート大会を実施した。教室内の活動よりもさらに抵抗感を示した。第3回は2年次5月。クラス替え直後の交流も兼ねて学年で実施した。第4回は初めてPDA方式で実施した。今回は抵抗感はあまりなかった。粘り強い継続的な活動の必要性を実感した。

(2)実践内容

第1回 1限 導入 2限 準備 3限 Round 1 4限 Round 2 & Round 3

PDA方式のディベートであるが、事前に論題を提示（宿題廃止）準備型と即興型を融合したものであった。

- 1) チーム作り：成績でチームを平準化し、12チームで編成
- 2) グループ：3チームを1グループとし、グループ内で gov→opp→judge と回す。
- 3) 試合結果：google form を使い、judge 3名分の point/勝敗を集計
- 4) 表彰：Best Debater / 1~3位のチームを表彰。

第2回 クラス対抗とし、group 内に異なるクラスの3チームで巴戦。トピックはあらかじめ提示。学年行事として午後3時間、3round を実施。ポータルサイト・フォームにて連絡、集計。クラス表彰と学年 Best Debater 表彰

第3回 3motion 制を採用（「動物園廃止」「フェイクニュースに罰則」「元彼の写真廃棄」）から両チームが合意した論題でのディベート。あとは2回と同じ3時間のプロジェクト。

第4回 該当時間にくじ引きでチームを編成→15分の準備時間→試合→講評。ジャッジをフローシートで採点。他の生徒はジャッジの評価による。1時間完結。「授業でのタブレット活用」おまけ4回のあと、1クラスは上位6名で編成したモデルディベートを観戦、互いに評価した。

(3)まとめ

- 1) すぐに即興型に入らずに準備型も併行する。
- 2) ディベートのスピーチシート、評価表などの必要なものはポータルサイトで共有する。
- 3) google form を活用し、生徒のフィードバック、ジャッジの得点集計に利用する。
- 4) 生徒の反発にめげずに積み重ねれば、抵抗感は減る。下位生が原稿を持たずに3分話すのは大変。
- 5) 第4回の段階まで来れば、実施する教員のハードルも低くなる。

即興型ディベート「授業導入報告書」

徳 田 稔

長野県長野高等学校教諭

(1)授業での即興型ディベートの導入について

教育課程表の中に、独自設定科目で「英語キャリアプロジェクト」という授業を1学年と2学年で週1時間設けており、その中で、1学年は10月から3月上旬までの約6ヶ月間、2学年は12月から2月までの3ヶ月間、パラメンタリーディベートを行なう。

(2)実践内容

具体的には、1学年の導入はペアワークで行なう。「主張、主張のまとめとそれへの質問」を交互に繰り返す「Why - Because Game」や「one-minute monologue」でやりとりのリズム感を養い、それを発展させて「ピンポンディベート」で refutation の仕方を学ぶ。次のステップでは4人1グループで10チームを編成し、同時に5試合の展開で理解とパフォーマンスを高めていく。11月中旬からは1時間(55分授業)でブレーストーミングとジャッジも含めて1試合ずつ行なう予定。各チームの4人目の生徒がジャッジの役割を担い、ラウンドごとにPM、LOなどの役割と共にローテーションしていく。毎週1回の授業なので、2月下旬までに、1学年は各クラスでおおよそ10から12ラウンドの試合を予定している。

2学年は前年度に学んだパラメンタリーディベートの基礎をベースに、更に難易度と抽象度の高い論題に挑戦し、議論の構成も一層緻密で複雑なものにできるよう、またPOIによってより高度なディベートになるように指導していく予定。1月からは、6週連続でクラス内マッチを計画しており、セミファイナル及びファイナルを行なって各クラスのベスト4進出チーム、ベストディベーターチームを表彰する予定。更に、各クラスのファイナルに進出した2チームによる学年ディベートクラスマッチを3月の土曜日の午前中に学年行事として行なうことを予定している。

(3)まとめ

昨年度は、新型コロナウイルスの影響でディベートクラスマッチなどのイベントがことごとく中止になったが、今年度はなんとか実施できるように願っている。生徒たちは、「英語キャリアプロジェクト」というディベートを含めた諸活動を行なうこの授業を楽しみにしており、4技能のバランスが取れた英語力の養成が十分に期待できる。

即興型ディベート研究報告

橋爪 伸幸
関西創価高等学校

(1)はじめに

英語でディベートを行うことは、私の日々の英語の授業での大きな一つの目標であります。ディベートの価値を感じながらも、実際に英語の苦手な生徒、議論の不得意な生徒、英語の好きな生徒、議論の得意な生徒と、様々なレベル、得手不得手のある生徒に、英語を運用してのコミュニケーションを行うことは、とても困難を感じています。しかし、英語でのディベートの実施は、生徒たちの英語に対する見方を大きく変える可能性を孕んでいると確信しており、生徒の状況・ニーズに一番沿う形で、英語ディベートを実施しました。

(2)実践内容

生徒たちにリサーチを1時間日本で実施。その後、日本語でのディベートの実施。その次の時間に英語でディベートを実施しました。またこのクラスの目的は、アカデミックライティング力の向上を目指しており、1年間通じて、「結論を最初に伝え、その理由を記述する」、というエッセイ形式を教えております。その内容は、ディベートに非常に似通っている為、ディベートの実施が、そのままクラスの目的達成に寄与していると感じました。またそのように生徒にも伝え、ディベートがアカデミックライティング力を向上させることを納得させました。

授業後は、ディベートで行った同じトピックでエッセイを書かせ、提出をさせた。

(3)まとめ

生徒たちからは様々なフィードバックを得たが、概ね肯定的な意見が多かったように思う。これから、実施を続行し、生徒のコミュニケーション能力・批判的思考力・相手の立場になって考える能力・ライティング力・リサーチ力を高めていきたいと思う。

即興型ディベート研究報告

仲村 智子

神戸市立葺合高等学校

(1)はじめに

本校には、国際科と普通科があり普通科の中でも「英語系」という系があるなど、英語教育には力をいれている。1学期は、2学年全体の授業の中でパラメンタリーディベートを取り入れ、speaking力を磨くとともに、論理的思考の伸長に努めた。

(2)実践内容

国際科2年生の時事英語の授業では、1学期にディベートを行った。時事英語は、クラスサイズが小さく（1クラス40人を2分割）、またALTと日本人教師がそれぞれのクラスにいるので、指導が行き届くことが利点である。国際科とはいえ、出来る生徒に圧倒されspeakingに自信がない生徒もいるが、ペアでの活動のおかげで、どの生徒も非常に活発にディベートに参加していた。ここでのディベートの形は、パラメンタリーディベートとアカデミックディベートの良いところをとった形式がとられており、例えば、motionはその場で発表されるが、相手への反論の準備時間が1分与えられペアと考える時間があったり、reconstructの時間もあったりする。また、事前には反論の仕方やコンストの書き方の指導などもあった。こういった無理のない形で、生徒が様々な社会問題に触れ、自分の意見を論理的に展開し、相手の意見に対し反論を行うというディベートができていて、非常に教育効果が高かったと思う。

普通科ではコミュニケーション英語Ⅱの授業で、週に1回ずつディベートの練習を行った。1学期は主にコンストラクティブスピーチを作成し、相手のコンストへ反論を行う、という練習を行った。週4回ある授業のうち、ALTが来るときに主に練習を行い、ALTとペアで活動したり、意見をもらったりということができた。授業では国境なき医師団の医師がトリアージを行う場面があり、そういったモラルジレンマを取り上げる場面が多々あったのでテーマを深く考えるという点で効果的であった。

(3)まとめ

国際科も普通科も、1学期だけでなく2学期、3学期とこういった活動を継続していく予定である。ディベートに関しては、生徒への波及効果が大きいだけでなく、教員側の資質も向上すると実感した。日々研鑽を磨かないと、しっかりと生徒に指導することができない。特に英語運用能力がある程度ある生徒に関しては、ロジックを鍛えることが大切であるが、その「型」について教師側が学ぶ必要があると思った。

今後も、よりよい授業への導入を追求していきたい。

即興型ディベート研究報告集テンプレート

平井 和仁

熊本県立第二高等学校

(1)はじめに

本校は昨年度より全クラスに1週間に1回の割合で即興型ディベートに取り組んでいる。今年度も2～3週間に1回の割合で全クラスでディベートを行っている。即興型ディベート用のスピーチシートを冊子(15回分)にして全生徒に配布し、いつでも即興型ディベートの準備ができるようにしている。1年前はコロナ禍でやっと生徒に会えた中での即興型ディベートのスタートであった。1年間即興型ディベートを続けることで、「先生、今日はディベートしないんですか?」という生徒が次第に増え、2年次でも当たり前のように即興型ディベートをする様子が頼もしく見える今日この頃である。

(2)実践内容

ここでは実践内容として昨年度のディベートによって得られた成果や活動を報告する。

- (あ) 昨年度実施の GTEC Advanced スピーキングテストが同年度の2, 3年と同じ A2 レベルであった。ベネッセのスタディサポートの調査でも「話すこと」に対して苦手意識を持たない生徒が多かった。
- (い) 第6回PDA高校生即興型英語オンラインディベート全国大会 2020 に理数科1年の生徒3名が参加した。(令和2年度12月)
- (う) 第6回PDA高校生即興型英語オンラインディベート全国大会 2020 において授業導入優良校として選ばれた。
- (え) 令和2年度PDA熊本県高等学校即興型英語ディベート交流大会において28チーム参加の中で上位9チーム中5チームが上位に入賞し、ベストディベーター賞に美術科1年生1名が選ばれた。
- (お) 即興型ディベートの生徒たちが今年7月に行われる本県の準備型のディベート講習会にも意欲を見せるようになり、9チーム参加する予定である。
- (か) 即興型ディベートの大会に参加する生徒たちが、学年の学習するリーダーとして力を発揮するようになった。
- (き) 即興型ディベートの全国大会に出場した理数科の生徒が令和3年度台湾留学サポートセンター主催の台湾の大学生徒のオンライン英語での討論会に参加した。

(3)まとめ

上記(2)の成果のように、即興型ディベートに取り組むことで得ることは非常に大きいことが窺える。今後は、ディベートに必要な知識・技能を成長と共にさらに深めつつ、学びに主体的に向かう生徒の育成を継続していきたい。

即興型ディベート研究報告集 PDA21-1

発行日 2021年8月6日

発行所 一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会

大阪府堺市中区学園町1-1 大阪府立大学 工学研究科 機械工学分野 中川研究室内